

『酔鍛磨庵』の生い立ち

七輪から工房立ち上げまで

ヒサボウ

酔鍛磨庵の 生い立ち

甥の熊公さんは、中学時代から、三つ違いの兄、Kさんと共に、機会が有れば、必ず盛岡に住む私の処へ遊びに来ていた。

妻の妹である彼等の母の実家が岩手の雫石で、祖父母も健在だったので、東京からの孫達も、その度、歓迎され、学校が休みになれば、必ずと言って好い程、大学卒業まで、先ず最初に盛岡へ、『ただ今』と言って、荷物を下ろしていた。

この兄弟は、夏には夏山、冬はスキーなど、盛岡でなければ出来ない事を、経験している。

中学生になった頃、スキーをしたいと言ったので、近くの岩山スキー場で、大学の学生用のスキーを履かせ、なだらかな斜面で、先に50

mくらい、静かに滑って待ち、『此处まで滑っておいで・・・』と滑らせた。

ところが、雪の斜面がやや左に傾いていたので、真っ直ぐ私の処へ来ないで、二人共左へ滑ってしまった。

中学生くらいの年ごろになると、何も言わなくとも、それが、どうしてかが、経験して見て初めて分かるので、ヒントを与えるか、見本を見せるかで、後は本人任せである、大学教育もそうであった。

それが、現在の熊公さんは、小学校の教員として、冬になるとスキー教師に変身し、趣味の鍛冶屋では、鉄は赤いうちに叩くと、ハンマーを振り下ろし、汗を流している。

その兄は、山好きの風評が漏れてか、今、さいたま中学の教頭として、校長への登竜門である福島県の、雪深い山の中、南会津田島の館岩にある『さいたま市立少年自然の家』で、責任を持たされ、2年目の冬を迎えている。

何れも教育の道に進み、年期を重ねている。

先頃、日本では、教育基本法の改定で、国会は大きくもめたが、二人とも今、その渦中にある。

昔から、『三つ子の魂、百まで』の教えがあり、幼少の頃の純真無垢に染まった色は、何時までも消えずに残り、欲求心が強い年頃は、何でも吸収するので、善悪を教えながらの教育が必要であり、昔の軍隊教育みたいな強制は、出来ないし必要はないと思う。

あくまでも、親や教師が、先達になって教える環境を、作るほか手だてはなく、他の動植物と同じように、育てたように育つと思う。

兄弟二人が中学生の頃、始めて三人で岩手山の登山をした。

山での登り岩場での三点支法や、下山の時の、次の足場の見きわ目かたなど、大事なテクニックを知ったのも、その頃らしく、高校時代になると、食料や寝泊まりその他総ての行動計画を、地図を見ながら綿密に立て、予定に従って行動し、山へ入ってはは、山の気まぐれ天気で、予定とおりに行かない時があり、予定は常に未定

である事を、身をもって体験している。

それでも予定計画はきっちり立て、実行は詳細に記録する習慣が、やがて社会に出てからも、役に立っているようである。

ところが、何も予定をしないで、山へ行ったことがある。矢張り二人が高校時代か、妻も乗せ四人で早池峰山に向かった。

岩手大迫町から岳部落を通り、早池峰山、中腹の門馬峠の鳥井前に車を止め、何となく登山道を歩き始め山に向かっていた。

普段着のハイキング姿のまま、緩やかな登り道を、歩き続けるうちに、檜の樹林帯を抜け、周囲の見通しが好くなり、腰を下ろした。

少し休んだ後、このまま登ろうと言う事になり、登山道を歩き始めた。早池峰山の中腹から上は、霧で見えなかった。登山経験など、全くない六十歳のバーちゃんは、目の前の登山道を、前後の二人に護られて、足元あしもとだけを見て歩いた。

中腹の、くさりや鉄梯子などの岩場では、ロープで、上下から安全を確保し、つり上げるよ

うにして、なんとか早池峰山の頂上に達した。

残念ながら、視界は0であった。山頂で眺望を楽しむ余裕も、豊富な高山植物を愛めでる余裕も、全く無かった。それでもバーちゃんには、その霧、視界0が幸いだった。高度差や、岩場の怖こわさを感じた様子はなかった、おそらく、家庭の主婦が、家の二階へ何回も上がる、その目の前だけに、気持が集中していたからだと思われた。

山頂が見えないだけに、本人は、登山の意識など全くない登山で、無理にひっぱり上げた三人は救われた。そのバーちゃんも、今は天界である。

大学生になった頃の熊公かつさんは、冬の私の北海道出張にも、スキーを担かついて同行し、各地のスキー場で、粉雪の感触を楽しむ程になっていた。

車でのドライブを兼ねたキャンプ生活も、夏休み中の日課であった。

本州最北端の、大間岬海岸でのキャンプでは、

早朝イカ漁から帰った船から、取り立ての生イカを分けてもらい、イカ刺しを作って食べた。当然男料理である。イカの皮向きにはおば一ちゃんの知恵があり、男の知らなかった簡単な方法を知った。

登山に限らず、不自由な、限られた物での生活体験は、やがて役に立つ時があるもので、炊事洗濯は、女だけの専売では無くなった時代に、男でも気軽に腰を上げる事が出来る下地は、若い時の経験が物を言う。

彼等のそうした課外学習があってから、30年が過ぎた。

私共は20年前に、盛岡から須賀川へ越して来たので、東京からの距離は半分以下になり、社会人になった多忙の中でも、車で気安く往復する機会が増え、やがて、熊公さんは長年抱いていた鍛冶作業が、須賀川の環境で芽吹いた。

その、生い立ちのあらましを、簡単に次の年表にした。

年 表

平成12年9月	家庭用七輪で鍛冶屋を始める
13年6月	新七輪での鍛冶作業
14年8月10日から17日までの鍛冶作業	
9月28日から10月1日までの鍛冶作業	
12月20日から24日までの鍛冶作業	
15年3月24日から28日までの鍛冶作業	
6月6日から8日までの鍛冶作業	
8月17日から24日までの鍛冶作業	
9月28日から10月1日までの鍛冶作業	
12月21日から24日までの鍛冶作業	
16年3月24日から28日までの鍛冶作業	
5月3日から6日までの鍛冶作業	
8月17日から24日までの鍛冶作業	
12月11日	工房「酔鍛磨庵」の火入れ

機会あるたびに須賀川へ来ると、庭の芝生と一緒に連れて来た子供達とキャッチボールなど

をしていた。ある時、七輪や木炭、それに金床や大きめのハンマーを持って来ていて、荷を下ろすや直ちに、庭で七輪に炭をおこし、真っ赤に焼けた鉄片を、金床の上で打ち始めた。『鍛冶屋の教え』という本に啓発され、日本古来の鍛冶技法、軟鉄に鋼を付けて刃物を作る技法『鍛接』に挑戦するということであった。

焼けた赤い鉄の、力任せで叩かれた部分は、平たくなって行くのが分かったが、七輪で焼く部分に限りがあり、苦勞が目に見えた。鋼と軟鉄は何とか付いたものの、色々な課題がみえたようだった。

翌年、須賀川へ来る前に、大きめの七輪を探し求め、更に焼く鉄を掴むヤットコ制作依頼をしてきた。市販のヤットコでは短くて、用をなさなかったのである。

街の通りで、以前見かけた鍛冶屋を思い出して、行って見た。人の気配は無くとも、陳列棚には、鋸やナダ鎌が飾られてあり、鍛冶作業の場所もあった。

奥から出て来た店の主人に、ヤットコの話をしたら、市販のヤットコでは鍛冶は出来ないことや、昔、刀を打ったことがあるとか、専門的な話が切れ目なく、山から汲んで来た水だからと、お茶まで出され、鍛冶には全く知識がないのに、好い話相手にされた。

必要な寸法のヤットコを頼んで帰ったが、その後、その爺さんも亡くなり、今は通りから見えた鍛冶屋の看板も無くなっていた。

この他に、金床の台にする太い丸太の注文は、製材所で切り残しの丸太の根本を分けて貰った。その製材所も今は無く、更地になっている。

何れも、車で通る道筋で見かける店ばかりであったが、わずか数年で、見慣れた店は消えている事に、世の移り変わりの早さに、今の世相を感じた。次の年には、更に大きい火床を、自分で作って来た。設計図を描き、耐火煉瓦を組合わせ、通風その他を考えて作った試作火床の、試運転も東京では出来ない、逸る心^{はや}を待ちかねて、炭をおこし、七輪の火力を強めた掃除

に使うブローアーに代わって、送風機まで備え、木炭の火力調節は、思いの儘に見えた。

毎日送られて来るメールに、火床の設計図や、出来上がった写真などを添えて来て、それを見るたび、次の鍛冶作業を夢みながらの、楽しそうな毎日が目に浮かび、人は、何か目標を持ち、それに集中し挑戦する気持ちは、何ごとにも代え難い宝ではないか思われ同感した。

やがて、長目の鉄棒も適宜に鍛接出来るようになり、小刀を作り始めた。

鋼と軟鉄の鍛接には、これでもかと、繰り返しが続いたようで、鎚を振る腕に休みは無く、入れてやったコーヒーが、冷めていた事は、幾度もあった。

好きな事を、夢中で始めると、疲れも時間も眼中には無く、ひたすら金鎚の音を響かせていた。

鍛冶作業の日時には限りがあった。次の鍛冶作業までの、何ヶ月間の寸暇に、鍛冶に関する参考書、その他の情報は、見逃すことなくあさ

り続け、鍛冶屋に関する知識を十分に詰め込んで、須賀川の臨時青空工房へ、走って来ていた。

毎回のこと、休む間もなく鎚音を響かせる。この音、この響きは、都会では、間違いなく公害である。幸い東隣りのマンションは日中は無人、表通りは四車線の車道、西隣の中学校は校舎が遠く、環境は抜群であった。

スーパーで購入した木炭は、瞬く間に無くなり、鍛冶専用の松炭が欲しくなり、本家に相談し、趣味で製炭をして居る人を見つけ、特別に松炭を焼いてもらった。

鍛冶屋は、松炭を使うのは常識でも、それを使う鍛冶屋が無い今日、松炭は特注になっていた。

藁灰もそうであった。鍛えた鉄を焼き入れする前に鉄の組織を整える必要がある出来るだけ、ゆっくり冷ますのに、藁灰が用いられていた。

最初はスーパーで、袋詰め^{いなわら}の切り稲藁を買って来て藁灰を作っていた。大量の藁も、焼けば

一握りの灰にしかない。

昔の農村地帯は、何処へ行っても稲藁は、有り余るほど見かけたが、今はそれが無く、秋の稲刈りと同時に、切り刻まれ、田んぼに鋤き込まれている。

その藁を探し求めて庭で焼き、藁灰を作った。

この夏はその藁灰が底を尽き、藁を荷作りして送ってくれ、とのメールが入った。

藁の荷づくりは面倒と、庭で藁を焼き、灰にしてから、簡単に宅急便で送った事がある。

須賀川の、青空工房での鍛造も、次第にたくみ匠の知恵や技術を身につけ、真っ赤に焼けた鋼鉄の温度は、暗がりでない、見分けがつかない事を知り、庭に天幕を張るようになり、青空工房では無くなった。

それを思いば、鍛冶屋は、皆暗がり、ふいごで風を送り、炭火が火花を散らすのを、面白く見ていた記憶があり、それだけ村や町に鍛冶屋は必ずあった。

その頃、バーちゃんのにんちしょう認知症も、少しずつ進

み、無断外出に注意していた。

その見守りを兼ねるように、鍛冶作業の位置を替えて貰った。

今までは、部屋から見る鍛冶作業は、その後ろ姿しか見えなかった。その向きをか換え、部屋から作業が見え、作業しながら部屋も見える様に位置し、バーちゃんにも鍛冶作業の動きが見える様にした。

作業の向きをか換えたら、汗だくで、力一杯での銚の上げ下ろしなど総てが、部屋から座したまま見え、その姿を見かねて相銚を思い出し、試しながら手伝う事にしてみた。

熊公親方がヤットコを握った左手で、真っ赤に焼けた鉄を、金床上で打つ位置を決め、右手のハンマーで力強く打ち下ろす、相銚はその間に、銚を打つ、餅搗きの合いどりと同じである。

ハンマーは、年寄りには重かった。片手では無理なので、両手で、しかも立った儘では、ふらつくので、椅子を用い、腰を下ろしての作業となった。

親方と弟子の呼吸が合わなければ、出来ない仕事である。親方の打った箇所^{箇所}に打ち下ろす、その所と打つタイミングは、難しいものであった。

『鉄は熱いうちに打て』と、昔から言われていて、人間にも共通していた。凝り固まった老骨は、修正に手間取るのが、はっきり分かった。

合い鎚の打ち始めは親方熊公さんの合図で、振り上げた金鎚を、素早く打ち下ろす、そのタイミングとリズム、それに打つ位置など、三つの事を考え、最初は助走として、台の空打ち^{からう}を二、三回して、四回目くらいに、本打ちに加わった。

響きも、単調でなく、トンテンカンと、二つの鎚音が交互に蘇^{よみがえ}った。

ところが、打った鋼鉄を親方が見て、臨時弟子の打った鎚は、水平では無かったようで、やや斜めに痕^{あと}が着いていた。力まかせに打てば好いではなかった。それを知ってからは、鎚を水平に打ち下ろす様に気をつけた。

二人共初めての共打ちである。見た目と違って簡単ではなかった。

矢張り一人で打つよりは、早めにかたち作る事が出来るのは、当然であり、やがては電気ハンマーに連^{つな}がる事になった。

須賀川の仮工房での、鍛冶作業もその都度、成果が見えて、出来上がった小刀の型が、素人が見ても、そのすばらしい進歩が、はっきり分かった。

研ぎについても、最初は砥石だった。それがグラインダーに代わり、仕上げが早くなり、須賀川で相鎚した製品は、東京へ持ち帰り、ほとんど東京で研ぎ、鞘も見事に作って、出来上がった物を、次の作業の時に持って来て、見せて呉れた。その切れ味といえ、握りや鞘の細工の手の細やかさは、見事であった。

彼は、高校時代から、甲冑や日本刀に興味を持ち、それら国宝級の甲冑の知識もあって、修学旅行などで、四国瀬戸内海の大三島神社へ行き、土産話に、源平時代の名刀や、甲冑の話を

聞かされ、松山へ行ったついでに、二回ほど行った事がある。

彼が日頃作っているのは、ナイフであって、銃刀法に抵触しないように寸法をや形状を整えている。

ずぶの素人が、彼の話に誘われて、日本刀を見直した時、その長さといえ、切れ味といえ、実用を超えた美術品である事が、目の前での鍛冶作業を見せつけられ、日本刀の打ち始めに、白装束の刀匠が、必縄を張られた神聖な鍛冶場での、作業を思い出し、世界に誇る伝統のある、日本文化を思い直した。

5年間の須賀川工房にも、終わりを告げる時が来た。

鍛冶作業の実が上がり、次第に思う様な作品が出来る様になり、鍛冶鍛冶作業する時間の頻度が欲しくなり、自宅からもっと近くに、鍛冶作業の出来る場所が欲しいと、こぼすようになってきて、ネットその他で探し求めて、2年くらいが経ち、環境や地価の格安など、希望とお

りの土地が見つかり、現在地に『^{すいたんまあん}酔鍛磨庵』の工房を、立ち上げて2年になった。

平成16年12月11日、火入れ式が行われた。

その日は是非来てくれと、言われていたが、歩行が満足でなく、ましてや都会の一人歩きに自信がなく、迷っていたが、途中からひき帰ってもとの覚悟で、誰にも知らせず出かけ、工房には誰よりも早く着いてしまった。

工房の火入れ式からの事や、その後の工房『^酔鍛磨庵』に就いては、^{熊公}のホームページに譲る。

工房立ち上げから二年が過ぎた。工房開設以前から、スプリングハンマーの導入を考えていたようで、工房の土地取得の時もそうであった様に、毎日のメールから、その欲求が伝わってきていて、何れもその願いが実現し、この年末には遂に長野の黒姫、鍛冶屋の町『^{古間}』から、スプリングハンマーが届いた。

小さな七輪から始めた青空鍛冶屋が、埼玉の

上尾に腰を据えて、同志と共に、鉄を叩き汗を流し、飲み且つ酔いながら、同じ思いを語り合うところとして、『**酔鍛磨庵**』と名付けて立ち上げた。今それが着実に実現している。

何事も念じていれば、叶えられるものである、私は中国旅行を八十五歳まで続けて来て歳を重ね、雲南ゆんなんの旅を取り残した思いを、常に抱いていた。ところが米寿の歳にチャンスが訪れ、雲南なの旅を為し遂げる事が出来、心残りは無くなった。

過去には、そうした事が多々あり、総て希望のぞを捨てない事も、処世術の様だ。顧みて、須賀川工房の5年間は、熊公さんの思いの儘であったかも知れないが、こちらは逆に、過去の貸し、投資を回収し、それを生きる糧かてにしていた。

彼が、且って種を蒔き、育てて呉れたパソコン熱を、冷めないように、須賀川へ来るたびに扇あおぎ続けて呉れていた。

昼は火床の火を扇あおいで鉄を熱し、夜はパソコンその他で、老いた脳に新風を吹き込むなど、

無駄な時間は無かった様だ。

その結果はテレビ取材で、放送記者が、メールに音声や、イラストを入れた事に、吃驚びつくりしていたが、これも彼の叩くハンマーで、かたち作られ育てられて、昨日と同じように、何の変わりなく、炭火が消えなかつただけと、思っている。

思いば今は、昔と逆転し、人生の山登りも、若い時は、裾野で見ていた山頂が、遙かに遠く見えていたのに、頂上近くになり、今、九十路の胸突き八丁、その急坂に差し掛かり、近くの見えない頂点に向かって、先達は居なくても、後ろからは、ハンマーの空打ちで、声援され支えられ、三点支法や足場に気を使いながら、更に若いパワーを戴きながら、一步一步、ゆっくり登り続けている今日この頃である。

平成17年12月

※ 文中の緑色で示した部分は実名が入っている所なので熊公が訂正しました。

※ 本来伯父は縦書きでこの文を書きましたが、PDF ファイルにすると文字のずれが出るので横書きに編集しなおしました。その為、数字は漢数字から算用数字に置き換えました。

※ 次ページ以降の写真も熊公が後から挿入しました。



工房入り口に掲げてある看板

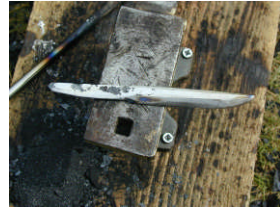
酔鍛磨庵初火入れ式の様子



七輪鍛冶からのスタート



初めての七輪鍛冶
2000年9月28日



長方形七輪での作業
2001年6月8日



新火床での作業
2002年12月21日



酔鍛磨庵での作業



鍛接の瞬間



古間から届いたスプリングハンマー

積層材作り



現代の再生鉄 SS-400と、古い鉄をサンドイッチにして積層材を作ります。

5枚を一度に鍛接します。



折り返し鍛錬することで5-10-20-40層と積層されていきます。

錬鉄双頭レールの素材化鍛錬



国鉄草創期の大阪ー神戸間に敷設された錬鉄レールです。

錬鉄レールを折り返し鍛錬して、地金の素材にします。



錬鉄は一筋縄では鍛造できません、慎重に慎重に打ち延べて4回は折り返して鍛錬します。

最近の作品



最後の二本は保秀のブレードを使った浦川師の作品